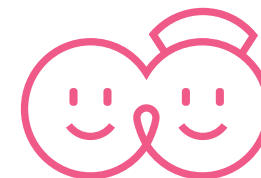


2011年「看護の日・看護週間」

「忘れられない看護 エピソード」集



公益社団法人日本看護協会



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

〈主催〉厚生労働省／日本看護協会

〈後援〉文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

〈協賛〉日本病院会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全日本病院協会／全国自治体病院協議会／日本助産師会／
日本精神科看護技術協会／日本訪問看護振興財団／テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／パラマウントベッド(株)／
(株)ジェイティービー／(株)ソシエ・ワールド／トップツアー(株)／ナガイレーベン(株)／ワタキューセイモア(株)

ずっと忘れられない看護がある。

目次

【看護職部門】	
最優秀賞	3
優秀賞	4
入選	6
【一般部門】	
最優秀賞	13
優秀賞	14
入選	16

はじめに

5月12日は看護の日です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ
1990年に制定されました。それ以来、

「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに
厚生労働省と日本看護協会の主催で、
毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2011年度は、「忘れられない看護エピソード」を
看護職と一般の皆さまから募集。1940通の応募の
中から選りすぐりのエピソードを20話、集めました。
ケガや病気で入院したり、家族に付き添ったり。
患者さんやご家族にとっても、看護にあたる
看護師にとっても、心に残り、ずっと人生を支えて
くれるような看護体験があります。

その後を生きていく糧となるような、
忘れられない言葉をもちょうともあります。
看護は、人生を変えることだったのであるのです。

看護にまつわる感動のストーリーが、生きることの
素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出す
きっかけになれば幸いです。

最後まであきらめない！



看護部門
最優秀賞

【愛媛県・篠川照美】

20年前の話である。大学生A君が、昏睡（こんすい）状態でHCU（ハイケアユニット）に入室し、希望で母親が付き添うようになった。母親は大学まで出向き友人の声を週替わりで録音し、毎日耳元で聞かせた。また自らも廊下に響き渡る声で明るく語りかけていた。母親の愛情の深さ、信念を感じさせる日々であった。私も同じ気持ちで関わったが、母親のそれには到底かなわなかった。しかし、どんな刺激に対してもA君からの反応はなく、人工呼吸器の音だけが病室に響いた。

数カ月同じ状態が続いた。ふと、なんとなく分かつているのではないかと…という印象を受けた。医師に報告し、脳波も取ってみたが、結果に変化はなかった。あきらめようとするが、やはり何かある。しかし、周囲は気のせいだと言って取り合ってくれなかった。それでも私は母親と共に信じ、毎日刺激し、その「何か」を明らかにしようとした。

ある日母親が、「この子アイスクリームが大好きだったのよね…」と

ボツリと言った。「刺激を与えてみよう」と考え、医師の許可を得て、アイスクリームを買ってきた。十分に安全性を考慮した上で、微量を舌にのせてみた。するとA君の顔の半分が口になった。笑ったのである！ 大きな口を開けてうれしそうに笑った。確かに笑っていた。2人で泣いた。1カ月後には一般病棟に転出するまでに回復した。さらに数カ月が過ぎた頃、母親と一緒に「歩けるようになった」と病棟まであいさつに来てくれた。寝姿と違って2本の足でしっかり立っている彼は大きく見えた。

数年後、病棟入口にスーツ姿の男性が立っていた。「誰だろう…」。業者かな？」と思いつつ「何でしようか」と入口に向かった。そこには満面の笑みを浮かべた男性の姿があった。その笑顔はアイスクリームを食べた時の笑顔そのままだった。自然と涙が出てきた。数年遅れで無事に大学を卒業し、社会人となった姿を見せに来てくれたのだった。1人で来た彼の姿が大きく、大きく揺らいで見えた。

ラストスマイル



看護部門
優秀賞

【埼玉県・島田好子】

野上さん（仮名）は、40代後半の働き盛りで、高校生の息子さんと、間もなく受験を控えた中学生の娘さんがいらつしやいました。クモ膜下出血で倒れ治療を受けましたが、残念なことに意識が戻らないまま亡くなりました。

その日の朝、野上さんの死後の処置をしていた夜勤の看護師を手伝うために、私が病室に伺ったときはすでに、呼吸器は外され、寝巻も新しいものに替えられていました。お顔を整えながら、髪が脂っぽくなっているのが気になり、奥様に洗髪を申し出たところ、快諾していただきました。

ベッドの端に野上さんの頭を寄せ、お湯をかけシャンプーを泡立てて、頭をマッサージするように髪を洗っていたところ、病室に差し込む朝の日差しを受け、野上さんがまるで笑っているように、本当に良い表情をされているのに気がつきました。

野上さんのお姉様が近くに寄ってこられ、「気持ちよさそうですね」と声をかけられると、娘さんも寄っ

てこられ、お顔を見るなり驚いた声を上げ「ねえ、ねえ、ママ見て。パパ笑っているよ、ほら」と奥様のほうを振り返りました。病室に明るく弾んだ声が響き渡りました。奥様も荷物整理の手を休め駆け寄ってきて、「本当だ。パパ、笑っている。気持ちいいんだね」と言って携帯電話を取り出し、髪に白い泡が付いたままの野上さんのお顔を写真に収めたのです。

一瞬戸惑いましたが、ご家族の気持ちをお察すると、これまでの数週間、緊張の連続だったはずです。野上さんとの会話はもちろん、笑顔を見ることもなかったのです。

野上さんのその笑顔は、髪を乾かし、くしで整えた頃には消え、亡くなった方のお顔に戻っていました。病室には、親戚や職場への連絡を買って出た息子さんの頼もしい声や、荷物整理をしながら指示をする奥様に、しっかりと答える娘さんの声が行き交っていました。

柿の味



看護職部門
優秀賞

胃ろうが造設され、在宅での栄養管理も経腸栄養剤で行われることが多いこの頃。訪問看護で忘れかけていた「食べることが生きる力をつける」ことを、あらためて教えられる出来事があった。

赤い柿の実が午後の日差しに映える頃、私はいつものようにその老夫婦の家を訪ねた。寝たきりのご主人が元氣な時に描いたという柿の絵が、ベッドの近くにあった。「庭の柿も立派だけど、この絵もステキね」と私が言うと、「夫は柿が大好きなの。もう食べられなくなっただけ」と奥様が答えた。「手術のとき『胃ろうはいつでも閉じることができる』と先生が言ったから、そのうち食べられるようになるのかと思っていたのに……」とも。

胃ろうのあるご主人は自宅に戻つて以来、一度も口から食事をしていない。誤嚥（ごえん）による肺炎が心配だから仕方がない、と看護師の私も思っていた。しかし、その日は少しでもこの夫婦の気持ちに添いたいと思い、「柿のお味見をしてみませんか？ 体を起こして、

【東京都・東海林朝子】
むせないようにするから大丈夫よ」と、味見を勧めてみた。

柿の汁を湿らせたスポンジで、舌の表面をそつと拭うと、ご主人は勢いよくゴックンと飲み込んだ。便秘気味だったお腹もクワッと鳴り、腸の動きを感じる！

「すごい。飲み込みが上手ですね。柿の味、分かりましたか？」というと、うなずきながら二筋の涙が頬を伝う……。わずかな柿の汁で、こんなにも心身がいきいきとしていくとは。

「もう一度口から食事がしたい」と涙が訴えているようだった。もともとと食を味わってもらうことを大切にし、胃ろうになつても、口から味わうことを簡単にあきらめさせてはいけない、私はそう心に刻んだ。そして、この出来事は「忘れてはいけない私の看護エピソード」になった。

アイコンタクト



看護職部門
入選

いくつになつても親は子どものことが心配である。がんの終末期にある母親と精神疾患を持つ息子さんの訪問看護に就いていた時の出来事だ。

余命わずかな彼女は70歳を超えていた。トイレまで歩くのもやっとの母親は、息子に何もしてやることができない。息子さんは対人恐怖症のため、他人が家に入るとなると大変な騒ぎになつた。

家としての営みが機能しなくなり雑然とした室内で足を踏み入れられる場所は、茶の間にある息子さんが座るこたつの座布団と、彼女の木枠のベッドとその周囲1畳ほどのスペースのみ。その間を息子さんが母親を案じて行き来する。私がそこを通ると息子さんは大声を出す。申し訳ない気持ちで彼女の居室へ行きケアを行った。

ある日、彼女の血圧を測つていた時、背後に何かを感じた。振り向くと、中の間を隔てた茶の間に息子さんの視線があった。彼女を見返すと、彼女も息子を見ていた。このベッドの高さと息子さんの

【福島県・沼崎美津子】
座高が、お互いの言葉のないコミュニケーションを結ぶたつた一つの導線だと察した。母親として息子に愛情を送っていた視線と、母親の安否を気遣う息子の視線が結び合う、かけがえのない導線だったのだ。そう気づいた私は、度々転落する彼女のベッドを撤去しようと考えた愚かな自分を恥じた。その日はベッド脇に布団を敷き、転落しても大丈夫なようにして訪問を終えた。

3日後、庭に彼女のベッドが無残に放置された光景を見てがく然とした。遠くに住む親せきによつてベッドが撤去され布団に寝かされていたのだ。そのあくる日、彼女は逝つたと聞いた。母親と息子の命の線を断ち切られた瞬間を感じた。息子さんは取り乱し大声を出して入院となり、私の訪問は終了した。

あの「アイコンタクト」は今でも鮮明によみがえつてくる。これからも命の絆の見えない線に感性を高め、看護を追求していこうと思う。

ギフト

★
看護職部門
入選

「私に何ができるのか？ 看護師である私にできることは？ 人としての自分にできることは何だろうか？」

彼女に出会ったのは、こんなことを考え始めた看護師5年目の春だった。彼女は、トライアスロンで鍛えた健康的な身体と弾ける笑顔で、いつも明るく病と向き合っていた。彼女は私を、時に娘のように、時に職業人として必要としてく

に帰るね」

【福島県・藤本順子】

在宅療養に移行した彼女を訪問したのは、2カ月が経とうとする頃であった。すでにウトウトしがちであったが、目が合うと、初めて出会った時と同じ、くもりのないとびきりの笑顔で迎えてくださった。自分は今こんなケアを受けてこういう物を食べ、家族はローテーションを組んでいつもそばに居てくれてとても幸せだと、ゆつくりとかみしめるように教えてくださった。形見分けのように、トライアスロンで入賞した時のメダルをいただきたい。そして最後にこんなギフト（言葉）をくださった。「私みたいに、自分で自分のことを決める人が増えるから、そういう世の中になるから頑張つてね。手伝つてあげてね」

それから10年後、私は彼女からのギフトを胸に、緩和ケア認定看護師となった。1人でも多くの方が、最期まで自分らしく生きることを支えるために。

3度目の入院で、彼女は主治医からこう告げられた。「抗がん剤ができなくもない。しかし体力はかりが落ちて好きなことができなくなるかも知れない。私は一日一日を大切に生きてほしい」。主治医の心からの言葉に、彼女は涙をためた目で「ねえ、先生にこう言われたんだ。それってさ、そういうことだよね？」と私に問いかけてきた。「もうすぐ死ぬつてことだよね？」人間対人間の対話だった。目をそらすことはできず、2人で号泣した。しばらく泣いた後、彼女は顔を上げて宣言した。「決めた。家

「あの日」があつたから

★
看護職部門
入選

「力が足りなくて…。本当に申し訳ありませんでした」

そう言つて頭を深々と下げたまま、医師が涙をぬぐうと、続くスタッフの方々の目からも涙がこぼれ落ちた。

10時間前に救急搬送された息子の救命に関わった医療スタッフの皆さんが、霊安室に来て下さっていたのだ。

「じゃあ行つてくるね」と短い言葉を残して登校した息子が交通事故に遭い、救急搬送されたと連絡を受けたのは家を出てからほんの1時間後だった。

学校に程近い救命救急センターに運ばれベッドに横たわる息子を見たとき、私は一瞬、母からナースに戻っていたのかも知れない。今まで何度となく見慣れた風景だったから…。この先の展開が手に取るようにわかる自分が嫌でたまになかった。

17歳の息子は、ほぼ即死に近い状態だった。

病室にか細く消え入るように鳴るモニターと人工呼吸器の音だ

けが響き渡り、それからの数時間は、まるで映画のスクリーンを覗ているかのような、実感のない時を過ごしていた。

【茨城県・小林純子】

頭が混乱して現実を受け入れられなかった。医師や看護師さんの姿も声も、何も覚えていない。思考も心も凍りついたような感覚になりぼやけんとしていた時、救命に当たつてくださった医師の声にはつとした。そうか、息子は死んでしまったのか…。

息子に関わった医療スタッフ全員が涙を流して下さっていた。看護師さんのおえつが聞こえる。それは、人として息子の最期の数時間を見守つて下さった、医療に関わる温かい、人の涙だった。

人の死に慣れる人間なんていない。人の思いは伝わるのだ。最期の場面でたくさんの方の思いを受け取った息子は幸せだった。

人生の中の大きな試練であったけれど、今も母は誇りを持って看護の道を歩いているのです。

太郎さんの縫い針

★
看護職部門
入選

40年ほど前の4月、看護学校を卒業した私は内科病棟に配属された。何につけても自信がなく病棟の廊下をいたずらに浮遊する「新人看護婦」(その頃の呼称)であつた。

先輩に叱咤(しった)激励されながら少し慣れてきたその年の秋、大きな荷物とともに太郎さん(62歳)が入院してきた。末期の胃がんで、住んでいたアパートを引き払つての入院だつた。家族を持たず、日用品の行商で生計を立ててきた人だつた。無口で愚痴は言わず気の毒なくらい我慢強かつた。痛みが強い時期もあつたはずなのに、痛み止めを要求することは極めて少なかつた。

やがて食べたものが胃を通過しなくなり、吐いて衣類を汚すことが多くなつたが、太郎さんは体がつらくても自分で洗濯していた。汚れ物が多くなつてきたある日「私に洗わせてください」と言うといつものは取り付くしまもなく断るのに素直に汚れ物を渡してくれた。そんなことが続いた後、太郎さんが

ふと病室の前で「これやるよ」と小さくて大きなの割には重い包みを私の手のひらにのせて、戸惑っているうちに行つてしまつた。包みには絹針、木綿針、毛糸とじ針、ふとん針などがそれぞれ銀紙に包まれ、輪ゴムでグルグル巻きになつてゐた。太郎さんが商つていた品物であつた。

冬の初めの寒い夜、太郎さんは独りで静かに空の向こうに旅立つていかれた。

やがて、私はその縫い針を持つて嫁ぎ、保健師として働くようになった。その針たちは私と夫と子どもたちの衣類のボタンを付け、かぎ裂きを縫い、給食袋を作るのに活躍した。太郎さんの針は保健師としての私を励まし成長させてくれた。胃がん検診の受診率向上に取り組んだときには、太郎さんが私の背中を強く押したような気がした。針を使うといつも未熟な看護師であつたことをわびる気持ちになる。これからもこの針を大切にし、太郎さんを想い、慢心しがちな自分を律していこうと思う。

ナースコール

★
看護職部門
入選

看護師になつて1年半が過ぎた頃、毎月訪れる生理の日に激しい腹痛を覚えるようになりました。どうしても耐えられなくなつたある月、職場の婦人科外来を受診。「子宮内膜症ね。取りあえず薬で小さくなるか経過をみるけど、手術も考えておいてね」と診断され、それから1週間も経たないうちに激痛が襲い、産婦人科病棟に直行。翌日手術となりました。

段取りをしている間は痛みもなく、翌日はすんなり手術に入るのだらうなど安心して眠りに就きました。ところが明け方4時頃に、急に痛みが襲つて来ました。同室の人たちは気持ちよく寝入っているし、今夜は出産が多く忙しそうだし、朝一番の手術だからもう少し我慢しよう……。そう思いましたが、痛みによる吐き気もしてきたので、意を決し、ナースコールを押しました。すると、足音も感じさせず数秒で看護師が来てくれました。そして「自分で入れる？」それとも私が入れる？」と言つて痛み止めの座薬を差し出してくれました。

あまりの迅速さとナースコールを押した意図を理解してくれていたことに驚きました。「自分でします」と言つた私に、微笑んで出て行つた看護師が目標の存在になりました。座薬は恥ずかしいだろうという気遣いと、私の状態を把握していなければ、ナースコールⅡ痛み止めの要望とはならなかつたでしょう。

とても小さなことでしたが、私には忘れられない出来事でした。それは、この入院で患者の気持ちと看護師の看護観を両方学ぶことができたからです。何回もナースコールを押す患者はまだいい。押せない患者は我慢や遠慮があつたりする。それから私は、気兼ねなくナースコールを押せる信頼関係を築けるように担当部屋を訪室して、患者と話をし、情報収集しながら患者が何を求めているのかナースコールが押される前に気づけるような看護を心掛けました。今は検査担当として働いています。情報収集は今も続けています。簡単なようで実は難しい事です。

あの日の朝焼け

★
看護職部門
入選

【滋賀県・外川昭子】

「朝焼けが
とてもきれい」ともきれいに

開けくれし

看護婦の瞳(め)に

外景(そと)も映りし」

これは私が患者さんから頂いて、今でも大切にしている言葉です。

もう20年近く前、ナースになつて1年目の私はICU(集中治療室)という大変な職場に配置され、さまざまな病気で生死の境を彷徨(さまよ)う患者さんを目の前に、毎日が緊張の連続でした。

ある夜のこと、私は深夜勤務で手術後の患者さんを受け持つていました。真夜中の病室には、心電図モニターのアラームや人工呼吸器の空気が響き、意識のある患者さんの眠りを妨げます。その方もその夜は眠れなかったのでしょう。2時間ごとの検温をするたびに目を開けて「ありがとう」と、私に声を掛けて下さいました。

きつい勤務の中で、1つだけ楽しみにすることがありました。ICUには東側に大きな窓があり、そこ

から見える朝焼けが夜勤で疲れた私をいつも癒してくれるのです。

その日の朝も晴れてきれいな朝焼けが見えました。私はカーテンを開けて「ここから見える朝焼けは、とてもきれいなですよ」と、その方のベッドを少し動かしてあげました。

するとその方は不意に涙をにじませて、「こんなきれいな朝焼けを見たのは初めてです。自分はこれまで仕事ひとすじで生きてきて、病気になつて初めて立ち止まった気がする。この先の事を考えてとても不安な一夜だったが、おかげで心が落ち着きました」と話されました。そして私から紙とペンを借りると、さらさらと何かを書いて「下手な文章だけど…」と言いながら私にその紙をくださいました。「ありがとう、これからも頑張ってくださいね」という言葉を添えて。私が初めてナースになつて良かったと思つた瞬間でした。

あの朝、患者さんと見た朝焼けは、その文章と共に今でもはつきりと思い浮かべることができます。

Mちゃんが走つた日

★
看護職部門
入選

【熊本県・西山由美】

私は30年ほど前、総合病院で新人ナースとして働いていた。ある日、小児病棟から3歳のMちゃんが転棟してきた。彼女は、トラックに下半身を巻き込まれ救急に運ばれてきた患者だった。両足骨折、骨盤骨折、骨盤内臓器損傷という状態で、救急から小児病棟へ移つた後、私のいる病棟に転棟してきたのだった。

Mちゃんは、人懐っこく明るかった。右下腿切断術や、人工膀胱などの数々の手術を受ける中、右下肢に義足をつけ、Mちゃんのリハビリが始まつた。どうにかリハビリ室で歩けるようになった頃、病院恒例の職員運動会が開催されることになった。Mちゃんの歩行訓練が進んでいたこともあり、理学療法士の先生からその運動会の「こどもかけっこ」に出ないかと提案があった。Mちゃんは出てみたいが、1人では走りたくないと言い、母親から「Mと一緒に走つてやつて」と頼まれ、私が当日一緒に走ることになった。

五月晴れの当日、麦わら帽子と

白いブラウス姿のMちゃんは「ドキドキする」と言いながら、私の手を握りしめていた。私は「やつたけちゃん私は患者さんたちからそう呼ばれていた」と一緒に大丈夫だよ」と言いながら、自分もドキドキしているのを感じていた。「途中で転びはしないか」「義足が途中で外れたら…」という不安がよぎる中、「よいい、ドン」とピストルがなった。

Mちゃんは私の手を握つたまま走り出した。ゆつくりだけど、一生懸命に手を振り義足の足で走つた。そしてゴールした。その後母親のもとへ行き、得意そうに「Mね、走れたよ」と話した。母親は涙を流しながら「よく頑張つたね」とMちゃんを抱き締めた。母親と一緒にいた先輩が、「お母さんね、Mちゃんの走っている姿を見ながら『Mが走っている。またMの走る姿を見るこ」とができるなんて…」と泣きながら言っていたよ」と話して下さった。あれから30年、Mちゃんの走っている写真を見るたび、Mちゃんに思いをはせる。

父との永遠の別れ ― 看護への感謝

★★★★
一般部門
最優秀賞

父は仕事一筋で、私が物心ついた時には、すでに単身赴任の連続だった。学校行事にも家族旅行にも父がいた記憶はない。寂しさには慣れたが、ただ、「父にとつて仕事とは？」という問いの答えを息子として聞きたかった。しかし生意気盛りの自分は、膝を交えて父と話す機会を、とうとう逸してしまった。

晩年、脳を患った父は、病院に迷惑を掛ける存在だった。怒鳴る。点滴を引き抜く。転んで物を壊す。そのたびに家族は叱られ、病院に居づらくなった。転院先では、前の病院で迷惑を掛けたことを正直に話した。「仕方ないですよ。一番辛いのは、患者さんなんです」。この言葉と看護師の微笑にどれだけ救われる思いがしたことだろう。家族の重荷がすうつと取れ、父の様子が穏やかになった。

ある日、父はベッドで嘔吐した。息子である私は思わず飛び退いてしまったのに、近くにいた看護師は、すぐに父の背に手を当て、「関口さん、大丈夫ですよ。楽な姿勢にし

ましよう」と看護する。若い彼女の白衣や髪にまで飛沫がはねていた。しかしそんなことは少しも気にする風でもなく、その後の措置を済ませてくれた。使命感といえは簡単だが、それは温かな心に支えられた強さだ。

死の3日前、看護師がベッド脇で父と辛抱強く言葉を交わしているのに驚いた。父は部下と話しているようで、彼女もすっかりその部下になりきっていた。突然、父が叫ぶ。「北見の牧場で牛の出産がある。会社の獣医を連れて、雪をかき分けて応援に行くぞ」。彼女が返事をする、父は安心したように目を閉じた。私は初めて父の貴い仕事ぶりを知った。あの時知りたかった、父にとつて仕事とはという問いの答えとして、これ以上は必要なかった。

看護という仕事は、看護マニエアルが可能にするのではなく、深い愛に基づいた貴い行いの一つ一つによつて結晶する。

父との永遠の別れは、言葉に尽くせぬ感謝にあふれるものとなった。

気づいたこと

★★
一般部門
優秀賞

シングルで子持ち、特に資格も経験もない私。離婚した当時は、将来の不安を毎日感じながら必死に育児に仕事と奮闘していました。「1人で頑張らねば、1人で何とかしなければ」。もうその思いばかりで、毎日余裕がありませんでした。

そんな時、子どもがインフルエンザにかかり入院。母親ならば子どもの体調を気にしなければいけない時。それなのに、私といったら正直「また？ 仕事休まなきゃいけないじゃないの。クビになったらどうしよう」とそのことばかりが気になりイライラ。具合の悪い子どもに当たったり、子どもが話しかけてきても無視したりしていました。

そんな状況を見かねた担当の看護師さん。「お母さん、少しお話しませんか」と私を休憩室に呼んでくれました。

私の話を一通り黙って聞いてくれた後「今のお母さんにとつて大切なことを何でも、何個でもいいので書いてくれませんか」と。「なんで？」と不思議に思いましたが、そ

【宮城県・小谷野みゆき】

の夜、子どもが病室で寝た後に休憩室で筆を取りました。書いているうちに子どものことばかり書いている自分に気が付きました。それを何度も読み返すと、今までの自分が恥ずかしくなり、涙があふれて、忘れていた一番大切なことを思い出し、病室に入り、子どもを抱きしめました。

看護師さんは、私の今一番考えなければいけないことを思い出させてくれました。その紙を看護師さんに見せると、うつすら涙を浮かべて、読み終わると、につこり笑って「これは心の隅にでもいいので覚えておいてください」と一言。

その3日後子どもは無事退院しました。言葉数はとても少ない看護師さんでしたが、私にとつて心の救世主。今でも忘れずに、心に余裕をもつて子どもと接することを心掛けています。

泪（なみだ）の思い出



一般部門
優秀賞

【茨城県・稲角良子】

もう60年も前のことです。私は高校入試の夏期講習を受けるため、中央線に乗っていました。市ヶ谷駅を出て間もなく、隣の席の青年が「ぐえーっ」という奇声を上げてすべり落ち、全身を突っ張って動けなくなりました。乗客は戸惑って見つめています。

「人が倒れました。助けてください」。私は夢中で何回も叫びました。すると中年の女性が乗客の間をぬって来てくれました。私は倒れた時の様子を伝えました。青年の脈をとりながら女性は「私は看護婦です。次の四ツ谷駅で降りの方、駅員と運転手にごこのことを伝え、医師の手配をお願いしてください。病人は信濃町駅で降ろします。ご協力をお願いします」。何人かの人が「わかった」と答えました。

しゃべりながら看護婦さんは青年の頭を少し後ろへそらせ、顔を横に向け、ネクタイとベルトをゆるめ、シャツのボタンを外しました。それからハンカチを広げると持っていた週刊誌を広げて青年の頭の下へ

差し込みました。四ツ谷駅に着くと数人の人が駆けて行きました。青年は苦しうに荒い息をして吐き始めました。看護婦さんは週刊誌の角を折って受けながら、青年に声を掛けていました。私も週刊誌の角を折りました。手に付きましたが、汚いとは思いませんでした。（死んじやだめ、死なないで）それしかなかったです。

信濃町駅に着くと担架を持って数人の駅員が入ってきました。「私が付き添ってまいります」と看護婦さんは言った後、私を見つめて「ありがとう。すぐ知らせてください。この人はきつと元気になりますよ。あなたがいてくれて心強かった。よくやってくれましたね」

本当に優しいお顔でした。急に涙がこみあげて、止まらなくなりました。涙の中を、青年を載せた担架は急ぎ足で遠ざかって行きました。

忘れられない言葉に



一般部門
入選

【千葉県・小林利恵子】

「この子は生命力のある子よ。大丈夫！ 元気に生きている」

妊娠5カ月の安定期に大出血。切迫流産で不安いっぱいの私の手を握り、にっこりほほ笑んでくれた看護師さん。その言葉が「この子を助けて」と叫び続けていた私に、安堵と頑張る強さを与えてくれました。遠方の母や単身赴任の夫が駆けつける前のことでした。

長い入院を経て、無事に生まれたのは女の子でした。病気ひとつせず、反抗期もなく、素敵な女性に成長し、大学3年生になっていました。もう少しで親の役割も終わる寂しさで幸せーまさか、もう一度、娘の生命が危うくなるなんて夢にも思いませんでした。

体調の異変に気がついて受診。くだされた病名は「腫瘍」。良性ではなかったのです。当初は、命の期限さえあり得る状況でした。

「何で？ どうして？ 私でも主人でもなく娘なの…」。自分を責め、運命を恨み、娘より先に、私がまいつていきました。体重もキロ単位で減るばかり。手術の日は、

前日から眠れず、泣くこともできず、娘の手を握っていました。その時でした。

「この子は生命力のある子よ。大丈夫」

あの時の看護師さんの言葉が、突然聞こえたような気がしたのです。そう！ この子は生命力がある。絶対に死んだりしない！ あの言葉が私を再び前向きにしてくれたのです。

その後の抗ガン剤投与にも耐え、副作用から解放されるのに10カ月以上を要しましたが、娘は留年することもなく、この春社会人になります。

今、娘と機上です。憧れだったモンサンミッシェルへの旅を娘がプレゼントしてくれたのです。隣りの寝顔に、生きていてくれてありがとうとつぶやきながら、20数年前の看護師さんの言葉に、手を合わせる私です。2度も、その励ましに救われました。母娘とも、元気で生きています。ありがとう。

歩きなさいよ

★
一般部門
入選

事故で左脚を失った。ジンジンとさめてくる麻酔の中で、ただ考えた。「心臓、腎臓が移植できるんだ、脚だつて」

朝、先生に訴えたが、あつさり「義足があるよ」と言われた。義足！ 反射的に戦後すぐ、上野公園で見掛けた白衣の勇士の群れが浮かんた。黒い鉄脚を剥き出してガッちゃん、ガッちゃんと言が歩いていった。「アレかよ、アレを俺がかよ」。布団をめくると、ブツ切った大根のような脚の残りに涙した。

義足をにつけに湯河原の病院に転院し、初診の時、もう一度と高橋先生に移植の可否を聞いてみた。先生はじつと私の顔を見詰めていたが「今、僕にできるのは義足を合わせることだ」と静かに言った。傍らに立っていた小さい看護婦さん、マッちゃんが、顎をちよつとしゃくりながら小さくうなずいた。ボンヤリ部屋に戻っていた。「やはり駄目か。義足でどう生きられる？」頭の中が渦巻いた。

その夜、マッちゃんが義足を持つて現われた。ジュラルミンが光った。

「これ一番新しい義足よ、ちよつと持つてみて」。意外に軽かった。音もしなかった。「これでまず歩きなさいよ。歩いてから考えなさいよ、これがあなたの脚なのよ」

パツと頭の中が開けた。「そうだ、歩きに来たんだ」。当たり前のことだ、もう迷いはない。マッちゃんの言う通り、毎日決めた道を歩いた。昼食後すぐ病院の裏の山路を2時間、ゆつくり登る。右手に十国峠の山肌、左手はるかに真鶴岬と、さらに沖の水平線、空と海の碧さを吸いながら10分間休憩。帰りは険しい石ころ路。歩みごとに突き上げる痛さに耐えて「痛い分だけ早く歩けるわよ」のマッちゃんの言葉を飲み込んで降りる。希望があつた。

そして50年、何とか歩いて来た、イヤ、歩けたのである。苦渋の時はあの水平線とマッちゃんの「歩きなさいよ」の声と微笑を思い浮かべて乗越えられた。深謝している。

命の重さを教えてくれた看護婦さん

★
一般部門
入選

第一子出産という緊張と感動の瞬間は予定日より40日も早く訪れました。産声も上げず、顔も見られないまま、長男は救急車で県立の未熟児センターへ移送されたのです。

産後初めての面会で私が目にしたものは、赤ちゃん、と呼ぶのもためらわれるほど黄胆とチアノーゼがひどく、足の震えが止まりませんでした。数日後、主治医から、長男がダウン症であることを告げられ、それ以来、頭の中で「ダウン症」「障害児」という言葉がもつれ合い、せめぎ合つて苦しい日々が続きました。それでも悲しいほどあふれる母乳を搾つて冷凍保存し、バスで病院に届けるのが私の日課となりました。

ある日、面会室から眺める長男の保育器の周りを10人ほどの先生や看護婦さんが取り巻いている場面に出くわしたことがありました。この光景を目にした瞬間、私の心に恐ろしい感情が頭をもたげたのです。「もしかしたら、危篤状態になったのでは…、このま

ま天に召されてくれたなら…」と、一瞬でもわが子の死を望んだ自分が確かに存在したのです。この時の罪悪感30数年たった今でも、鮮明に心の奥底に潜み続けます。

【兵庫県・相崎美知子】

障害のあるわが子を疎み続ける恥ずべき親であり続けたかもしれないが、命の重さと、人としての心を教えてくれたのは、1人の看護婦さんでした。未熟児室のドアをそつと開けて、長男を抱っこして私の前に立たれたその方は、「先生から、ご長男の命は長くないと聞きました。一度も抱つこされないままでは余りにもお気の毒と思い、ご長男をお母さんの胸に一度だけでも…と考えていました」と言われ、長男を抱かせて下さったのです。誕生以来、一度も触れたことのないわが子。その体温。その息づかい。ピクリと動く小さな指先。私の全身に電流が走り、勝手にあふれる涙を拭くこともできず、私はその時、この子の命を守り抜こうと誓ったのです。

どんくさい努力

★
一般部門
入選

【兵庫県・若生知子】

元の生活に戻しましょう。大丈夫。けれどこれから彼女が大人になる間、時にはうまく物事が進まないこともあるでしょう。そのとき彼女はそれを病気のせいにするかもしれない。そしたらあなたの手術は成功で何も心配はなし。リハビリを頑張ったみたいにとんくさい努力をして大きくなりなさいと伝えて下さい」

その後、娘は退院し、元の学校生活に戻っていた。入院の間に勉強は遅れ、後頭部の大きな傷は思春期の彼女を悲しませた。しかし、その時々娘と話していたのはUさんの日々の姿と言葉だった。私に、甘えていないで子どものために前を見なさいと教えてくれた言葉だ。自分の努力不足を病気のせいにしてはいけない。将来を見据えてどんくさい努力をせよ。この強いコンセプトは私たち母娘を常に励まし、引張ってくれた。

今日、一浪の末、娘は看護大学を受験している。20歳まであと少し。なりたい自分になるためにどんくさい努力を続けている。

長い脳外科手術を終え、14歳の娘はHCU（ハイケアユニット）に戻ってきた。大きくなった娘は、ベッドの上で赤ちゃんのようになっていた。水差しで水を飲ませて体を拭きオムツを替える。赤ちゃんの時とは違い大きな体が重い。何をしても泣けてくる。そんな時ナースコールをすると看護師のUさんは、ニコニコ顔ですぐに来て何でも解決してくれた。動作は無駄なく丁寧、優しさで責任感のある横顔だった。私は初めふさぎ込み、Uさんに「なぜうちの子がこんなことに」と答えない質問をした。Uさんは微笑むだけ。「良くなりますよ」とか「お母さんのせいじゃない」とか何故言ってくれないのだろう、優しい言葉がほしいのにと私は大いに不満だった。

その後、一般病棟に移り、退院前のある日、偶然Uさんに出会った。「ゆきちゃん元氣になりましたね。リハビリも頑張っていますね」。娘の名前を覚えていたなんて、私は正直驚いた。するとUさんは続けて言った。「退院したらどんどん

長屋の天使

★
一般部門
入選

【奈良県・奥平由美子】

ん、おつちゃん、早よ保険証出さなかいなつー」と怒鳴りました。「すみちゃん、うちがついてるからな、大丈夫やで」と言い聞かせて、バジャマに半てんをひっかけた格好の洋子姉ちゃんは、荷台に座布団を敷いてすみちゃんを座らせ、彼女の両手をそーつと自分のお腹に回し左手でしっかりと押さえて、勤務する市民病院まで全速力で自転車をはこいで行つたのです。

洋子姉ちゃんがいて本当に良かったと思いました。的確で冷静な判断と素早い行動は、彼女のプロ意識と、大きな慈愛の心、そのものでした。

何針か縫って連れられて帰って来たすみちゃんは、白い包帯が痛々しい感じでしたが「これ、洋子姉ちゃんが巻いてくれてん」と少しうれしそうでした。

45年経つた今、みんなどうしているかなあと時々思い出します。少し認知症が進んだ母に「洋子姉ちゃん覚えてる？」と問いかけると、しばらく考えて「自転車乗つてどっか行つた」と言つて笑います。

大阪の下町の長屋に住んでいた頃、向かいの部屋に洋子姉ちゃんという看護婦さんがいました。隣りに住んでいた同級生のすみちゃんと騒いでいたら、夜勤明けで寝ている洋子姉ちゃんに「あんたらうるさいー」とよく叱られたけれど、宿題を見ってくれたり、風邪気味のときには「これが一番」としょうが湯を飲ませてくれたりするやさしい人でした。すみちゃんはお父さんと2人暮らしたつたので、洋子姉ちゃんを本当の姉のように慕っていました。

ある冬の日、隣りから「ガッシャーン」と何かが割れる音がして「ギャーッ」と叫ぶ声でしたので母と隣りへ飛び込むと、割れたお酒のビンが転がり、すみちゃんが手から血を流して泣いていました。洋子姉ちゃんも、走ってきて、見るなり震えるすみちゃんの手を素早くタオルで包み、しばりました。母が「洋子ちゃん、救急車やな」と言うと、自分が自転車に乗せて行つた方が速いと言い、果然としているおじちゃんに向かって「何してんね

忘れられない会話

★
一般部門
入選

【和歌山県・匿名】

れも吐き捨てるように…。

それでもMさんは「私は雨が好きな」
と特別話し掛けるでもなく半ばひとり言のように話し始めた
霧困気はとても優しくなった。

とても穏やかで、傷つき疲れ果てた私の心に黙って寄り添ってく
れるようだった。とても短い会
話だっだけれど、なぜか心に残った。

あれから1年が過ぎようとい
ている。

今日も私は生きていて、やっぱり
雨の日は好きにはなれないけれど、
Mさんの言葉を思い出す。雨が
降った日は「頑張らなくていい日。
今日は心がお休みの日」と自分に
言い聞かせながら生きている。

名前も顔もはつきり覚えていな
いけれど、もしもう一度、会えたな
ら「雨は好きじゃないけど、嫌いで
はなくなりました」。そして、「生き
ています。ありがとう」と言いたい。

「私、雨が好きな」
私が入院して何日目かの朝、看
護師のMさんはそう言った。
「どうして？」と尋ねると、
「今日は休んでいいんだよ、頑張
らなくていいんだよ、って言うてく
れているみたいで。晴れの日の日差
しは頑張れって言うてるみたいだけ
ど。雨はなんかほつとする。もちろ
ん仕事にはちゃんと来るんだけど
ね」と優しく笑って窓の外を見て、
点滴の確認をすると、私のベッドか
ら自然に離れていった。

なぜ私が入院したかという
と、簡単に言えば多量服薬と入水に
よる自殺未遂で運ばれたからだ。

薬の影響もあったが、ほとんど
受け答えもしない私に他の看護
師さんたちは腫れ物に触るような
感じで事務的なこと以外は話さ
なかった。

でもそれはそれでよかった。生き
残ったことで絶望感に満ちていた
から。

それがどうしてMさんと話した
のかよく覚えていない。たぶん、「雨、
嫌やな」と私が言ったのだろう。そ

祖母をよみがえらせた 命のサポート

★
一般部門
入選

【長崎県・石田雅博】

心筋梗塞を発症したあと、血
圧が40まで降下して昏睡状態に
陥り、「今夜が峠」と告げられた、
97歳の祖母が、翌朝、突然目を開
け、曾孫のように若くて愛らしい
看護師さんに向かって「ありがと
う。お礼をしますから」とかすれた
声を精一杯、発した。まさに奇跡
であった。

数時間前、苦しい表情を見せた
祖母の背中を、その看護師さんが、
ずつとさすってくれたことを、本人
は無意識の中で分かっていたのだ。
回復の見込みのないはずの祖母の
耳元に、彼女は、そつと顔を近づけ
ながら「苦しいですねえ。朝になっ
たらエアベッドに換えてあげますか
らね」と、優しく語りかけた。それ
は、病院に泊り込んだ家族の絶望
に一筋の明かりをともした救いの
言葉でもあった。

今からもう40数年前、私が小
学3年生の時のことだ。脚を骨折
して入院していた間、祖母は、孫が
遅れをとらないようにと、自ら幼
いクラスメートと一緒に毎朝、学校
に通い、児童用の小さな椅子に大

きなお尻をデンと腰掛けて、終日、
先生が書く黒板の字をノートに書
き写してくれた。この通り、人並み
外れた行動力の持ち主で、周りの
人に施しをすることが大好きで
あったが、反対に人からの施しをそ
のまま受け取ることができない、昔
かたぎの律儀な人でもあった。

あの夜、祖母は三途の川の岸辺
に立っていたに違いない。命が尽き
ようとする瞬間、当直の看護師さ
んの、安らぎを与える命のサポート
に接して、そのまま黙ってあの世に
渡ることができず、「ありがとう」
というこの上なく美しい感謝の言
葉を伝えるために、わざわざ戻って
きたのであろう。

それから一週間余り延命できた
お陰で、祖母は、縁のあった一人ひ
とりにお礼の言葉を残して、最高
に幸せな人生の幕を閉じることが
できた。それはあの日、祖母の命を
よみがえらせてくれた看護師さん
の、魂に響く看護があつたからにほ
かならない、と私は思っている。